子供から大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を　1994年9月1日発行　[隔月発行]

文化高知

'94年9月 NO.61

「Not here, but somewhere　Not now, but sometime」都築　房子

(財)高知市文化振興事業団

十人十色

山本　正男

「飛行機」は、B29の残影ではないが、戦中派はあまり好きでない人が多い。離陸・着陸の時が特に……。

どうせイヤな思いをするのだったら、一度浮いて降りるだけだから、東京でもニューヨークでも一緒でないか。今度は、世界の二大オークション会社「クリスティーズ」及び「サザビーズ」のニューヨーク会場に参加してみてはどうか――ということで、去る五月、当金庫スタッフ二名に行ってもらった。

ここ二年半、海外の絵画オークションの落札価格を見てきたが、国内相場と比して予想外に安値のようだ。特に、油絵は本格派の欧米の値段が円高もあり納得できる。逆に日本絵画の油彩が高値にすぎる。

私どもが、企業メセナとして絵画をテーマとしたのは動機があった。

五年程前だったか、中土佐町が県下で最初のローカル美術館を建てた。どこだってそうだが美術館の運営の中味を知れば知る程、勇気のいることで首長は、大変な決断だったろうと思う。

その美術館に行った時の二人の子供達の対話だ。

「理由は何か分からんけど、僕は夢二の絵が好きや。兄ちゃんは誰が好き」

「俺は、志功や」

鰹一本釣りの港街の一角に、何かしら温かい絵画の世界が漂い、理由なしにうれしかった。

およそ厳しい金融戦争、俗世にドップリ浸った日々だけに「文化感度」も零地帯、それだけにインパクトは強く、絵画の世界に強い関心を持つ動機となった。

その時、子供達が「理由はわからんけど…」と言ったように、絵画鑑賞を通じて発するものは、「誰々先生の絵が好き」「すごい絵だ」「作者はこんな思いで…」「こんな時代に…」と、万人の自由な受け止めが全てで良いと思う。

印象派、写実派、抽象、具象――がと、いろいろ難しくおっしゃる先生もあるが、「絵画文化」そのものは、ナイーブなものとして受け止めたい。街角の心情文化としても大切にしたい。

当信用金庫では、バブル崩壊後、暴落する絵画相場の中、ここ二～三年積極的にトップクラスの日本画、そして洋画と収集してきた。シャガールではないが、あまり偏向収集するより、内外作家・技法・画品・時代等、ワイドな視点でできるだけ高水準な作品を求める方針をとった。収蔵品百八十点は、順次全店ロビーで皆様方に対面できるよう巡回させていただくこととしている。

なお、前述のニューヨークで収集した絵画は、

①ルノアール
　一八九五年（五四歳）制作
　題名「ガブリエルの頭部」
②シャガール一九二六年
　（三十九～四十歳）制作
　題名「おしゃべりな女たち」
③ピカソ
　一九七〇年（八十九歳）制作
　題名「帽子をかぶった男」

外、カサット、ローランサン、キスリング、ブラマンクでした。

当店すなわち、街角ギャラリーを通じて、県民の皆様にホットな「文化」が体感できることを祈っています。

（高知信用金庫理事長）

ルノアール「ガブリエルの頭部」

シャガール「おしゃべりな女たち」

氷雪の国から涼風を

田中　光常

アフリカの猛獣、ライオン、ヒョウ、あるいはインドのトラ等の中から迫力ある写真と文章でもと思いましたが、今日この頃の暑さ、常夏のアフリカやインドのお話などしたら、「いい加減にしろ」と、どやされそうなので急遽取りやめて、北極に近いカナダの雪と氷の中で取材したホッキョクグマ（シロクマ）のお話に切り替え、少しでも涼風を高知の皆様にお届けすることにしました。

時は一九九二年の十一月のこと。私はカナダの北部に広がっているハドソン湾の西岸、ほぼ中央あたりの雪に覆われたチャーチルという街を訪れました。そこから雪上車（タイヤの高さが私の背丈ほどもあり、しかも幅が一メートル位もある機動バギー車）に乗って、凍ったツンドラ地帯を蛇行しながら三～四時間かかってチャーチル岬に到着しました。岬といっても一面凍って平ら、白一色、どこが先端なのか分かりませんが、その雪原の中に同じようなタイヤをつけた無機動バギー車（寝台車二台、食道車、ミーティング・ルーム車等ほか二台、全部で六台）が列車のようにつながれ、私たちグループ約三十人の宿泊基地になっていました。

日の出前、気温マイナス二十～三十度、防寒具に身をかため、撮影機材をかついで列車の後部のデッキから、機動バギー車に分乗して出発、朝日をバックにシロクマを写すのに一番良い場所を探し、待機していると、どこからともなく四～五頭のシロクマが周りに集まって来ました。日の出の最もタイミングの良い時に、おまじない程度のラードの塊を来て欲しい場所にドライバー兼指導員が投げてくれるので、シロクマも知っていて機動バギー車を見ると集まって来るのです。

シロクマがあまり集まらぬ時は、車の後方のストーブの上にイワシの缶詰をばらまき、室内を息も出来ないほどにけむらせ、窓を一斉に開けて遠くの方まで匂いを流し、その匂いで遠くにいるシロクマをおびきよせようという寸法でした。

大きなシロクマともなると、窓の下側まで顔が届くので危険極まりなく、二～三年前にはドライバーが窓の外に片腕を出して運転していてもぎ取られてしまったそうです。今回も一人手を噛まれたようでしたが大事にはいたりませんでした。ライオンとかトラのように怒って来るのではなく、好奇心おうせいな案外優しい顔つきでやってくるので、気をつけなければなりません。そこで薪のような棒を用意しておいて、私の窓の所に顔がのぞくと窓枠をガンガンと叩くので皆逃げてしまいました。同乗の外人たちは（ここでは私も外人だけれど）その棒をコウジョウ・スティックと呼び、シロクマの顔が近づくと引っ張りだこでした。シロクマが車の周りにやってくると、撮影するためにいやでも応でも窓は全開されるので、寒いことといったらありませんでした。私が用意した靴はアメリカの軍隊用でゴムが二重になっていて、その間に空気を入れる特殊な構造の防寒靴で、ミトンの手袋の中には使い捨てカイロを入れ、冷たいのを防ぎました。

1992年　カナダ　チャーチル岬にて

最初の二～三日は吹雪、あとの約一週間は天候に恵まれ、その上、例年になくシロクマの親子の数が多く、これまた、幸運でした。ハドソン湾の湖面がすっかり凍結してしまうとシロクマたちは氷上のアザラシを求めて湾内の奥へ行ってしまいます。凍結するまでは海岸線近くで沖の様子を窺いながら待機していて、それまでは波打ち際の雪や氷を掘って、背に腹はかえられぬと海藻を食べていました。日中お天気が良く温度が上がり、満潮となると、氷が溶けプールがあちこちに出来、そこで泳ぐシロクマの姿も取材できました。

冷たく、寒かった取材でしたが、何回でも訪れたい場所であり、ホッキョクグマは写して飽きない被写体です。

（動物写真家）

土佐去りがたし

―「地の会」高知展を終えて―

窪島誠一郎

七月十日まで高知県立美術館県民ギャラリーで開かれていた「地の会」十周年記念高知展が終了してホッとしているところである。僅か十二日間の会期ではあったが、県内外から約二千五百名もの美術ファンがつめかけ、めったに一堂に会することのない現代日本画壇を代表する実力画家たちの雄作群を堪能してくれたことはうれしかった。開催計画の初めからお手伝いさせてもらっていた者の一人として主催者冥利につきるとはこのことだろう。

展覧会名に「七人の鬼才たち」とあるように、出品画家である創画会所属の七人の画家たち――渡辺学、池田幹雄、毛利武彦、大森運夫、小嶋悠司、滝沢具幸、上野泰郎ら諸氏は、いずれも独自の芸術観をかかげた日本画壇の旗手であり、時代や画壇の潮流にまどわされない地道な制作活動に対する評価は高い。その画家たちがさらなる研鑽の場をもとめて、手弁当の勉強グループ「地の会」を結成したのが今からちょうど十年前、今回の展覧会はそれを記念して私の美術館のある信州の伊那文化会館（伊那市）で開催されたのについで、ここ高知においても地元有志たちの強い希望によって実現されたものである。

「地の会」の画家たちが今展へよせた情熱と期待も並々ならぬものであったが、巡回展開催にむけた高知文化界の方々の熱い協力にもあらためて頭を下げねばならない。企画当初から人あつめ資金あつめに奔走してくださった「ギャラリー・おおひら」主人大平哲郎氏、激務の合間をぬって実行委員会のタクトをふられた高知新聞社々主橋井昭六氏、また高知市文化振興事業団、高知県教育委員会、各助成団体、その他多くのボランティアの方々の親身の力添えがなければ、こうした実りある展覧会の成果は得られなかったといってもいいだろう。自由と改革の国土佐、黒潮の血さわぐ高知とはよくいわれることだが、私のような地方転々の展覧会興業師（？）にとっても、今回の展覧会開催の道のりから学びとった収穫はきわめて大きかったといえるのである。

「高知でこんな画家たちの仕事にふれられるとは思わなかった」

隣県香川から来られた彫刻家〇氏の言葉にも励まされたが、

「何だか会場全体の熱気に圧倒されちゃいました。一つ一つの絵が、まるで生きているみたいにこっちに迫ってくる感じがした」

ごくふつうの主婦からそんな感想をきいたときには身がふるえた。

また、朝早くから一点の絵の前に佇んでいた若い女性が

「今日一日ではとても見きれません。明日もこようと思ってます」

といい、手をにぎりあった若いカップルが

「ドライブの途中で寄ったんだけど、日本画って結構おもしろい。これからはもっと美術館にきてみたい」

そういってくれたのにも感激した。

画家たちの作品が放つアウラ（一種の磁力とでもいうべきか）と、その作品が息づく空間がもつテンション（緊張感）が理想的にむすびついた結果への讃辞だったろう。秀れた芸術家の作品が、その作品を理解し愛する者たちの手によってさらに力強く飛翔するという可能性をみたといったほうがいいかもしれない。日々精進をかさねる画家、その画家たちの作品をより十全な環境、条件のもとに展観しようとする主催者、そして鑑賞者。日頃、安易な売り絵展や有名大家の顔見世展にすっかり慣れきってしまっている私など、ツメのアカでも煎じたい「手づくり展覧会」の原点がそこにはあったのである。

私がインタビューした「地の会」七先生たちの感想もぜひお知らせしておかねばならない。

郷里千葉県銚子の漁民の生活を画布にきざむ渡辺学先生、当年七十七歳。「会場の静寂さと、隅々まで神経の行き届いた作品の展示に満足した。ご協力いただいた地元の方々に心から感謝申しあげたい」

北国のメルヘンを詩情ゆたかに謳いあげる池田幹雄先生、六十五歳。「色彩感がよく伝わる照明に感心した。みごとな演出」

荘厳な日本の自然美を追求してやまない毛利武彦先生、七十四歳。「これまで創画展も開かれたことのない高知で、私たちの絵を見てもらえることができたのが何より幸福」

信州伊那谷に伝わる浄瑠璃人形の妖しさに魅入られた大森運夫先生、七十七歳。「ただただ感謝感謝です。これからも少しでも人の心を惹きつけられる作品が描けるよう制作に励みます」

浄土と欣求の世界を独特の筆触でえぐる小嶋悠司先生、五十歳。「レセプションに出席できず残念だった。酒はうまいし肴もうまい。高知はいいところですね」

古代縄文の心象風景をカラフルな画面に展開する滝沢具幸先生、五十三歳。「せっかくのチャンスなので、この際四国をぶらりとスケッチ旅行してきます。思い出にのこる展覧会でした」

人間の生命讃歌、愛と祈りの姿を大屏風にえがいた上野泰郎先生、六十八歳。「僕もこれから足摺の方へ行ってきます。高知の人たちの人柄が気に入りました」

何しろ日本画壇の中でも自他共に認める頑固一徹な先生方のことだから、一つや二つの注文やご不満はあったにちがいないのだが、それを割り引きしても、七先生から「地の会」

高知展がまずまずの及第点をもらえたことは鼻をたかくしていいだろう。実行委員会世話役として大奮闘された大平さんはじめ、不慣れな作品荷ほどきから受付係まで、一人何役もこなされた文化振興事業団の面々、それに信州から徹夜運転でかけつけた私の美術館の若いスタッフも加わった終了日の打ちあげ会の酒がとりわけうまかったことはいうまでもない。

ただいつも思うことだが、こうした一地方における秀れた文化活動の灯がさらに大きな地域文化の炎へと育ってゆくためには、今後の地元有志の継続した努力が不可欠であることはいうまでもないだろう。そうした意味では、今展のシンポジウムで高知県立美術館の松本教仁学芸員もの べていたが、「行政主導の美術館にだけ頼るのではない、地域住民サイドからの盛り上がりによって作りあげられる展覧会」がもっともっと待望される時代がきているといっていいのかもしれない。「地の会」の十年が、画家たちの強い意志による一年一年の積み重ねであったのと同じように、今や私ら美術文化の一端を担う者にもまた、そうした一つの視点をねばりづよく追求する姿勢がもとめられているといえるのではなかろうか。

「若い我々が先生方の情熱に負けていたら恥しいですよ」

乾杯のときにだれかがそういっていたが、私も全く同感だった。

ああ、土佐去りがたし。今度再訪したときには、さらに何か一仕事挑戦してみたい気持ちになった高知の夜だったのである。

（信濃デッサン館主・作家）

高知レポート 4

第二刷発売中

土佐の自由民権運動

外崎光広 著　　A 5 ・172頁 定価1,000円(税込)

全国の自由民権運動における土佐の位置を正当に評価し、従来の土佐自由民権に対する誤解・偏見への反証を資料に基づき展開した問題提起の書で、土佐自由民権運動を考える上では欠かせぬもの。第二刷では「高知県永小作権ニ関スル請願書草按」「高知県永小作権請願ニ対スル参考書」を資料として新たに加えた。

〝北極光〟

小松　長三

オーロラを見たい……そしてその下に広がる広大なアラスカの大地を……。そう思い続けて二十年にもなるだろうか。平成二年八月、夏も終わりのアラスカへ初めて行った。このアメリカ最大の州は、日本の実に四倍強の面積をもち、その九割以上がいまだ原生自然のままのエコシステムを保っているが、これだけの広大な地域をそのままに保てたのは、人間の侵入を容易に許さなかった厳しい自然条件があったのと、近年の技術文明の進歩による自然破壊を極力回避すべく努力した成果であろう。

緑の原始林が遙か地の果てまで平坦に続く風景に出合った時、私達人間が、私個人が、いかに小さい存在であるかを思い知らされると同時に、愛しいものにも思えてくるのだった。

白夜の続く夏のアラスカではオーロラに出合う可能性はきわめて少ない。夜が暗くなければいけないし、晴れていて雲がないことなど、条件が整わなければそう簡単には見られない。

平成五年三月初旬、白い大地とオーロラに出合うべく再びアラスカへと旅立った。前回はデナリまでだったが今度は北極圏バローまで飛んだ。バローへの陸路はない。凍てつく大地が眼下に広がり、ユーコンがゆったりと蛇行する。日本で見なれた風景とはあまりにも違いすぎる。

上空から雪原のなかに黒い点のように見えたバローの、ツルツルに凍結した滑走路らしい所へ機は何とか無事すべり降りた。周辺のツンドラ地帯と北極海は雪と氷でただ白一色のみ。起伏のない平坦な広がりが、ぐるり一望見はるかす限り続いており、厳寒のなかただぼーっと立ちつくすのみであった。こんな場所でも生活している人達がいる。生きていることに感動をおぼえる。零下二十五度のバローでひと晩、フェアバンクスに帰って同じく二十度のチェナでふた晩、午後十一時頃より午前三時頃まで、完全装備の雪上でひたすらにオーロラの出現を待った。

三晩待ち続けてたった三十分間だけだったが、妖艶としか表現のしようのない緑色のカーテンの乱舞にやっとめぐり逢うことができた。

凍てつく天空はるか、地平から地平へかけて緑色の光の帯がゆっくりとまた時には激しく、音もなくゆれ動くのを息をつめて凝視するのみであった。夏と冬、二度のアラスカで見たものがそれまでの私の人生観にかなりの衝撃を与えた。私の生きてきた五十数年間には、類似する風景にさえ出合ったことのない初体験であった。

山が好きで北海道の山々や、アイガー、マッターホーンの山麓等も歩き、それなりにすばらしい感動を得てはいたが、アラスカのそれとはあきらかに異なる次元のものであるように思う。

何がそう感じさせるのか、アラスカ以降の自分がどのように変わったのか、未だによくわからないが、私の体の奥深いところで、折りにふれてあの淡い光のゆらめくのを今でも感じる時がある。

（高知県山岳連盟）

楽しいばかりが旅じゃない

平岡　美子

今までの私の旅はリフレッシュ、現実逃避型。結構楽しい思い出が多かった。でもそうでない時もある。

昨秋のこと、五日後に十七日間のスペイン・モロッコ海外視察研修を控えたその朝、私は激しい喉の痛みで目が覚めた。熱もある。どうしよう。持病の扁桃腺炎である。選りに選ってこんな大事な時に……。頭の中では出発警告ブザーが鳴り響いていた。この研修のために必死で仕事を片付け、数年分の貯金をおろし、何よりもストレス払拭のきっかけをつかもうとしていた旅なのに。

冗談じゃない！土壇場の気力で何とか熱を下げ、出発にこぎつけた。行ってしまえばこっちのものよ。視察の合い間を縫って、国際結婚の出逢いのチャンスも秘かに期待していたのだから。

だが、マドリードの秋は予想外に肌寒く、病み上がりの私にはちょっと応えた。案の上、ハードスケジュールがウイルスを蘇らせたのか、バルセロナでまた熱を出した。ああ、もはやこれまで。体調が勝れないことは本当に旅の楽しさを半減させるもの。でもこの不調の原因は全て自己管理不足にあると思うと、情けなさと同時にオーバーにも自分の人生をも考えてしまった。旅でこんなに自分を責めるなんて初めての経験である。もうスペイン男性に目をくれる余裕もなく、ただ日程をこなすだけで精一杯。

そんな思いを引きずりながら続く旅。アンダルシア地方を経て、ジブラルタル海峡を渡りモロッコへ。イスラム衣装を着た人々、羊の群れ、バスの傍らを行くロバの荷車。路上で商売をする少年たち。それら物質的には決して豊かとはいえない一つひとつの光景が、なぜか不思議に心安らぐ懐かしい風景に映り、無言で弱った私の心と体を癒してくれた。ひょっとして体調万全であれば、その目に映る風景は傲慢にも「貧しさ」としか受けとめられなかったかもしれない。不便イコール不幸ではない、そんなことを考えながら帰途についた。

帰国早々はこの旅に落胆していた私だったけれど、日が経つにつれ、両国の自然や人々の生活、文化により近づいた旅のように思えてきたのは、意外と扁桃腺のおかげだったかもしれない。

「楽しいばかりが旅じゃない」貴重な経験をしたこの旅もまた、心に残る旅になりそうな気がしている。

（高知市障害者福祉センター）

砂漠から原始林へ

中村　繁治

かつて中国を訪れた際、済南（チナン）の異民族学院でウイグル族の少女達の歌と踊りを見たが、「馬頭琴」風の楽器から流れ出る甲高い音色と旋律は物悲しく、砂漠の原野に狼の遠吠えを聞く思いでシルクロードの幻想に取りつかれた。

こんなこともあって、シルクロードを訪ねる機会をねがっていたが、文化大革命後その機会を得て、北京・西安、そして黄河沿いの蘭州（ランチョウ）からゴビの砂漠を越えて、ウイグル自治区の首都ウルムチへ飛んだ。

ウイグル自治区はその一省で日本の約四倍の広さがあり、十三の異民族が住んでいる。主体のウイグル族は、その昔は度重なる異民族への進攻に明け暮れたが、今では大半が農耕に定着し、漢族とも共存しており、偉大なる騎馬民族「匈奴（キョウド）」の末裔として誇り高く生きている。

ウルムチとは美しい草原を意味し、背後の天山山脈には五千メートル級の山々が聳え、その冷たい雪水は、灼熱の砂漠の地下に深く掘った「カレーヌ」（地下水道）で街々に流れ込んでいるが、手を切るように冷たい。

見学に訪れた工場で働く娘さん達は実に朗らかで、生きる喜びを体いっぱいに受け止めているようだった。その夜、われわれをもてなしてブドウ棚の下で唄い踊ってくれた彼女らの美しい姿は、今なお忘れられない。

次に、雲南の秘境、西双版納（シイサンパンナ）の旅を振り返ってみよう。昆明から空路、思茅（スウマオ）へ、そこから車で五時間、省都景洪（ジンホン）に着く。途中正装のイ族婦人に出会ったが、黒地に赤や金銀の見事な刺繍の衣装を着ていた。刺繍の技術には目を見張るものがある。

この地域は亜熱帯に属し、山は大半が原始林で植物や動物の宝庫である。平地には主に漢族と、日本人そっくりの傣族（タイ）が住み、山地には苗（ミャオ）族など少数民族が居るが、今なお調査不明の種族もいるらしい。

この地を訪れた私の関心は、かつて奴隷社会を形成していた魔の涼山のイ族と、お米と日本民族のルーツにあった。ちなみに、日本人の祖先を探れば傣族（タイ）に通じ、お米は、インド、ミャンマー（ビルマ）からこの地を経て長江に出、日本に伝わったという説がある。

青海からチベットの高原を流れる瀾滄（ランツウ）江は、ここからミャンマー、ラオスなどの国境を経てメコン河となり、遠く南支那海へ注いでいる。中国は広い。今日もまた各地のバザールは賑わっていることだろう。

（タックナカシゲ株式会社）

高知県の文化財 ㈣

土佐の名木「杉の大杉」

入交　幸三

「巨樹」＝古木＝名木は、故郷の緑の環境の生きた証人であり、遠い昔の歴史に夢を馳せるための、案内人である。現代に生きる我々は、こうした名木・古木を、次の世代に大切に伝えて行く責任があり、また、これらの木々が辿ってきた環境の歴史にも想いをいたし、数々の教訓を学ぶことも大切なことではないかと考えている。

樹々が育って林が出来、これらの林が集まると森林が出来る。この森林は、水を養い・大気を浄化し・土地の崩壊を防ぎ・静かな環境をつくる等、人類の生活には計り知れない恩恵を与えており、また一方では〝地球の生命の源〟であると言われている。

我々は、こうした樹々を、林をまた、森林を、活力に満ちた、健全な姿で、将来の世代に引き継いで行くことが、課せられた責務であると考えている。

◇所在地・長岡郡大豊町字竹の本（八坂神社境内）

◇樹　齢・（推定）二〇〇〇～三〇〇〇年

国指定・特別天然記念物

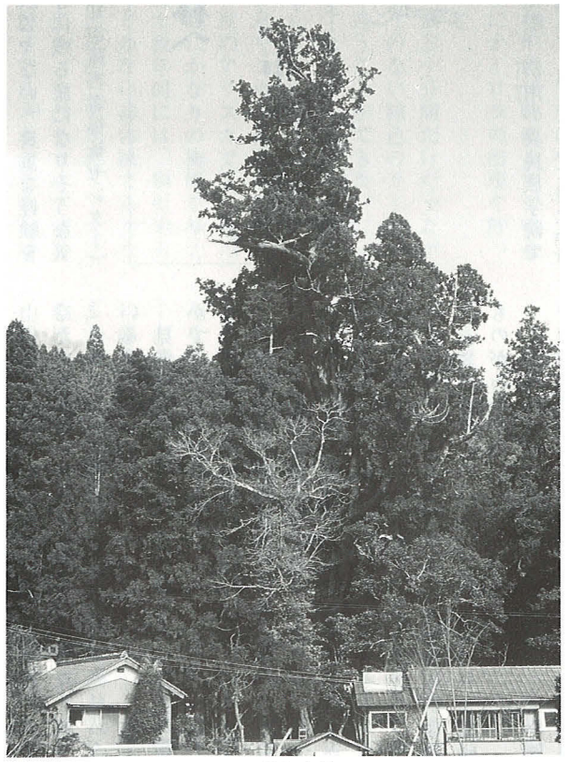
昭和二十七年三月二十九日指定

北大杉　樹高六〇メートル
　胸高周囲一三メートル
　根元周囲二〇メートル
　枝下高六メートル

南大杉　樹高五六メートル
　胸高周囲一一メートル
　根元周囲一六・五メートル
　枝下高六メートル

〔伝承〕

延喜十二年（西暦九一二）、遡ること一〇八二年の昔、杉本某がこの樹の下に、祇園牛頭天皇（京都八坂神社の祭神・祇園精舎の守護神）と、貴船大明神（貴布禰・水を主宰し、祈雨＝あまごい―および止雨に霊験あり）の尊像を祀ったと伝えられている。同町内桃原の熊野十二所神社には、天平勝宝四年（西暦七五二）、今より一二四二年の昔、京の都より土佐に配流された巫女が植えたと伝えられる、天狗杉（ボタンスギ）がある。この年は、奈良で「大仏開眼供養」が行われ、京師の巫覡（フゲキ）十七人が、土佐・伊豆・隠岐に流されたと伝えられている。



杉の大杉

〔現状と保存〕

推定樹齢は三〇〇〇年を数える老大樹には、諸々の腐朽症状が見られるようになっている。昭和二十九年九月二十六日及び昭和四十五年八月二十一日の台風では、両度にわたって大枝が折損し、以前より、枯枝等の傷痕より進行していた樹体内部の腐朽とつながり、樹幹部に大きな空洞を露呈することとなった。こうした被害の、防腐・防水対策として、昭和五十三・五十四の両年度にわたり、銅板による防水被覆工事が実施されている。この銅板工事は、見事な出来栄えで、二十年を経過した現在でも、極く一部に傷が見られるだけで、未だに十分防水の機能を果たしているものと見ることが出来る。しかしながら、樹体の腐朽は進行し、銅板工事周辺にも腐朽部の拡大が見られ、新しい対策工事の必要性も感じられるようになって来ている。枯枝の発生、樹勢の衰弱等は、基本的には樹勢の維持に必要な水分・養分を、根系より吸収することが可能か否かにかかっているものと考えられる。根系に損傷が発生し、こうした水分・養分の補給に不足が生じると、樹勢の衰弱が始まることになる。こうした根系の保全・管理は樹木の保護の基本となるものであるが、人類の生活の高度化・都市化の進んだ現代にあっては、最も、実施の困難な問題である。こうした根系の保護対策の一つとして、平成六年三月、「杉の大杉」に設置された木製の桟道は、根系を踏圧から護り、生育を支援する大きな効果が期待されるものである。

「杉の大杉」の樹幹内部は腐朽が進み、北大杉・南大杉ともに空洞が生じ、樹高六〇メートルに及ぶ樹体を支える支持力に疑問が持たれるようになりつつあり、既に、支持ワイヤーが架設されているが、さらに、数本の太枝に対する支柱の設置も検討されるようになっている。大杉の樹幹には数多くの枯枝痕が見られ、腐朽のもととなり、空洞の見られるものもあり腐朽の防止・防水の点から見れば、対策工事が必要と考えられる時期に来ている。巨樹を支える根系の生育部は、我々人間生活の都合により、改変・改悪・利用されており、大杉の立場になれば、呼吸困難や水分・養分の不足を訴えているとも感じることができる、大々的な土壌の改良も考える必要があるかも知れない。

杉の大杉桟道

最近は、自然・緑・森林・古樹に対する保護・愛護思想の高まりが感じられるが、「杉の大杉」この樹の保護に関する前述の対策を実施するとすれば、その経費は億円の台になるものと考えられるが、誰が負担するのか、「言うは易く、行なうは難し」。

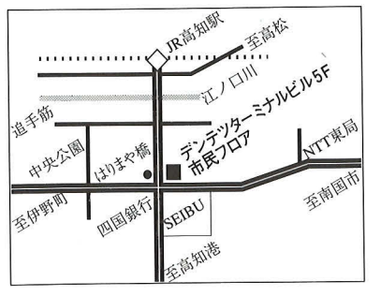
（県文化財保護審議会委員・樹木医）

市民フロアのご利用を

展示や会議に最適！

広さ・内装　96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所　在　地　高知市はりまや町一―五―一・デンテツターミナルビル5階



申し込み　㈶高知市文化振興事業団
☎73―4365

流路訪作(五)

嶺の薇（ゼンマイ）

山岡　浩

四国棟嶺に瓶ケ森（一八九六メートル）・寒風山・平家平が聳え連峯をなす。

大河・吉野川は、ここ瓶ケ森に発し県境を越え徳島に至る延々一九四キロの流路にして、その上流域を占める高知県流路は八五キロである。

連峰の谷底を穿ち東進する吉野川渓流は、本川村に大森川・長沢・大橋ダムをなし、大川村を貫きながら谷口に差し掛かる。右岸土佐町中島・左岸本山町吉野の地に、昭和四十八年、早明浦ダムが完成。流域の広大な土地とともに三八七戸の家屋、一四一ヘクタールの田畑とその集落が水没に帰した。

早明浦ダムは、四県分水の巨瓶にして、源流域の恩沢その及ぶところ計り知れず下流四方を満たす。

これより河岸開け、緩やかな流れが土佐・本山・大豊町を貫流。本・支流に河岸段丘発達、この上流域にありて豊穣の天地を拓く。

豊富な森林圏にあって、ことに銘材白髪檜（白髪山一四七〇メートル）は、土佐藩の林政に重きをなし、阿波藩を経ての流木輸送時代があった。

治封本山に在った野中兼山は、土佐藩の家老・奉行職として、その本拠地に多くの井堰・灌漑井筋を構築した。本山郷の下津井・本山上井・木能津上井と下井、森郷の宮古野・井ノ口溝・新井溝など、いまに変わらぬ水路が米どころを灌流する。

県境から東進する吉野川は、祖谷・山城・池田地方を中流域に、広大な下流域が徳島平野となる。

徳島の県域、その八〇％に及ぶ農産額がこの流域の所産にして、吉野川流域文化圏を形成する。

その昔阿波藍を育みし沃土は、京阪神を指呼の間に近郊的園芸輸送産地として躍進する。

下流域には、東部と阿波・麻植と美馬の地方がある。東部域は、河口寄りの肥沃な沖積平野にして、県域農産の半ばを占め、施設胡瓜・早掘甘薯・蓮根・ホーレン草・蜜柑・梨・洋ラン・酪農・肉牛・養豚の産地。阿波・麻植域は下流中央部、露地と施設の胡瓜・茄子・山麓の梅・スダチ・肉牛・水稲後作の大根・洋ニンジン・スイートコーン・茶等。下流北部の美馬域は、露地の胡瓜と茄子、ホーレン草、それにスダチ・柚子・梅などの果類がある。

溯りて池田・山城・祖谷にわたる中流域は、露地胡瓜など高冷地の夏野菜、それにゼンマイなど。

溯上県境に入れば大豊・本山・土佐町、ここは嶺北と呼称。大河上流域の米どころにして、あまた伝統特産品目継承の産地。

昭和三十年代に、夏場の冷涼性を生かすトマト栽培が、大豊町西峯に興る。以来この流域一帯に、夏場の露地野菜が定着、年々その品目を増やしてきた。その露地作りが雨除施設に前進、品質に量産の伸びが加わり、夏場野菜の老舗として躍進を遂げている。

主な園芸品目は、早春に芽だつウド・タラ・ゼンマイ、露地と雨除のトマト・シシトウ・インゲン・ホーレン草・ハウス苺、それに生椎茸・柚子・茶などがある。

さらに溯上、大川・本川村は、典型的な山岳型源流域の立地にある。

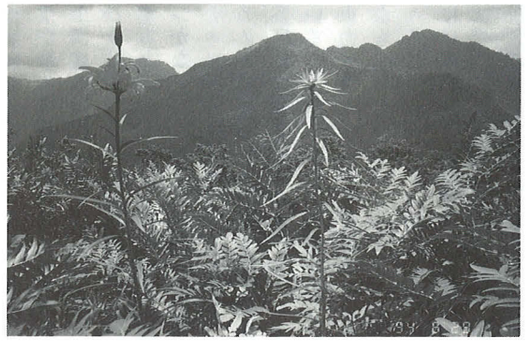
明治から昭和前期に至る主作目は、稗・黍・麦・蕎麦・大豆・小豆・甘薯・馬鈴薯など、それに換金作として楮・三椏・繭・茶・椎茸・木炭等、豊富な産品群を培ってきた。

これらの生産基盤は、何れも山岳立地特有の焼畑輪作農法、その所産であった。

昭和三十～四十年代の、農産物の需要構造変革期を迎え、伝統の焼畑農業の継続基盤を崩す。

ここ本川村の耕地変遷記録は、明治三十六年と昭和五十年を対比。水田一・九ヘクタールが一・二ヘクタールに、畑一〇六〇ヘクタールが二一ヘクタールとなる。依拠した焼畑農法、その撤退の激しさを物語っている。

さらに、早明浦ダムによる河岸の耕地・集落の水没が加わり、源流域農業存立の試練に直面するも、山岳型源流域の独自性発揮を旨に、地域農業の創造に挑む。渓谷のワサビ・露地と雨除のシシトウ・雨除ホーレン草・森林環境を生かす椎茸と肉牛、それに高麗雉など特産形成に向かう。



嶺のゼンマイに土佐姫百合

さて、源流から下流に及ぶ地域農産、その特徴的流れが挙げて園芸的作風に彩られてゆくとき、高冷地草場の自然な芽だち、野性種栽培化の代表品目ゼンマイがある。

吉野川のゼンマイは、量産・品質と早出しで知られ、大豊をはじめ嶺北と祖谷など、この中・上流域に優れて広く分布し主産地をなす。

ここに、新たなゼンマイ産地、土佐町瀬戸の里を訪ねる。

田井の街筋から登りにとって、ずい道を経てダム湖水。例年なら満々たる季節なるに、枯渇湖底に迫る空梅雨の渇水に風波岸を溶きて濁る。その浮上湖岸に、農耕・住居蹟を拝し、粛々としてわが眼底の痛む。

ダムを左岸に上りて右岸に渡り、いよいよこのダムに注ぐ瀬戸川溯上の道となる。

支流・瀬戸川は、稲叢山（一五〇六メートル）に発す。連峰の渓流土佐町北西域の流れにして、流域は森林畑作地帯。流路溯るほどに巨岩累々、渓谷天然の相を極め、支流屈指の景を誇る。

この清流、堰きて地蔵寺川へ、さらに堰きて土佐山の鏡川に導く。これ吉野川水系の鏡川分水にして、県都の水瓶、鏡ダム四十％の水量を担う。

やがて下瀬戸の里を登れば、峯近くして緩勾配の草状植生が樹林の天域に開けゼンマイ。その標高七〇〇メートル。

この地所は、集落の共有茅場にて、かつて屋根の普請・家畜の飼料と敷料・畑作の敷草と肥料など、里の生産、生活基盤を支えてきたもの。

秋草を刈る茅場は、二月の草焼きがあって四月中旬、ワラビ・イタドリ・ゼンマイが一斉に萌芽。塩漬・乾燥貯蔵食品として、伝統の味を継承してきた。

風化する茅場機能、これを今日に生かす道がゼンマイへの転進となり、共有地分割管理のゼンマイ作りが、昭和五十五年試作、五十九年からの本格的栽培となる。

茅場はすでに、ゼンマイ根株の密度ある植生にあって、手鍬の茅・雑草除去作業で、即ゼンマイ園造成に進む。これに胞子繁殖、株張りの自然繁殖加わり、短期に成園となる。

春のお礼肥・晩秋の元肥など、全てが畦立てなき平地作りにて、施肥はバラ播き。病虫害なく消毒作業省略の全くの自然栽培。

早春の萌芽、夏場の草勢に、絶好の適地性が窺える。

摘みどきは、四月五日から翌十日の間。焚く大釜の沸騰に三〇～四〇秒の茹で上げ。これを金網に広げ、ゼンマイ綿を除去する。

翌朝薄並べして天陽に半乾、揉捻機と回転乾燥機に掛け陽乾仕上げの後、「足切り」で製品となる。

故郷嗜好・田舎の味が賞味される時代。吉野川のゼンマイは、流域文化の原点を語る山草。草にして草にあらず、流域の宝作である。―完―

（元高知県農業協同組合中央会参事）

高知市文化振興事業団編
高知のエスプリ　A5判・一六〇頁　定価一、二〇〇円

高知県緑の環境会議編〈高知レポート7〉
森林と林業の再生　A5判・一五二頁　定価一、〇〇〇円

山本　大著
幕末の青春　坂本龍馬の生涯　四六判・一六八頁　定価一、二〇〇円

依光　裕編著
珍聞土佐物語 上・下巻　四六判　四〇八頁　定価一、六〇〇円　三九二頁

鈴木文憲・井本正人・岡根猪一郎著〈高知レポート6〉
協同組合と地域づくり　A5判・一三六頁　定価一、〇〇〇円

清遠幸男著〈高知レポート5〉
高知県の工業　A5判・一一二頁　定価一、〇〇〇円

外崎光広著
土佐自由民権運動史　A5判・四二四頁　定価二、八〇〇円

外崎光広編
土佐自由民権資料集　A5判・三四四頁　定価三、〇九〇円

土居重俊監修
高知市文化振興事業団編
土佐弁 土佐日記　B6判・一三〇頁　定価一、〇〇〇円

岡林清水著
高知県文学散歩　四六判・二七八頁　定価一、八〇〇円

高知の文化を考える会編
高知の文化を考える　A5判・一八八頁　定価一、二〇〇円

高知市文化振興事業団編
わがまち百景　A5変・二二四頁　定価一、二〇〇円

筒井広道著
画帳の歳月　A5変・二五六頁　定価二、〇〇〇円

土居重俊・浜田数義編
高知県方言辞典　A5判・七三六頁　定価六、一八〇円

高木啓夫著
土佐の芸能　B5変・三四六頁　定価四、九四四円

演奏会の楽しみ再発見 その②

宮田　信司

さて今回はムジークフェラインザール（楽友協会ホール）、コンツェルトハウスでの演奏会について記すことにする。ムジークフェラインザールはウィーンフィルハーモニーの本拠地で、あの有名な元旦のニューイヤーコンサートが開かれるホールである。

大ホールは豪華な金張りで、テレビ中継のために照明が増えるとクラッとする程である。夏場は空調が無いのか上部の窓の開閉だけが頼りで、空気は常に悪く熱気がこもり失神者が出るくらいである。でも手慣れたものですぐに場内担架で運ばれ、周りは多少ざわめくものの舞台では平然と演奏は進行している。特に後部にごく一部ある立ち見席は、よく見えない、聞こえない、空気が悪い、という評判にもかかわらず常に満員で、長時間立ちっぱなしのせいか本当によく倒れる人が出る。

舞台は意外に狭くフルオーケストラが乗るには窮屈そうである。その上満席の時に「舞台席」が発券されひな壇の延長上に客が座っていたりすると、オーケストラと客の区別がつかない。ファーストバイオリンもチェロも客席に落ちそうである。ピアノコンチェルトのピアノも半分は客席側に継ぎ足した台の上に乗っている。しかしこの舞台上の狭さが結束力を生み、良い演奏につながるのかもしれない。

もともとこのホールの響きの良さには定評があり、世界各地にここをモデルにしたホールができている。縦長のシンプルな造りと木製の椅子、高い天井が良い効果を生み出しているのに間違いはない。音響が良いということは客席にもいえることで、例えば演奏会中に何か物を落とせばその音がホール中に響きわたってしまう。お尻を動かせばミシミシと椅子はきしむし、結構気を使うものである。また体格の大きい人が多い筈なのに椅子は小さく背もたれは直角で決してリラックスはできないし、一階席は平坦なので前に大柄な人が座ったらもう絶対見えないなど不満も多いが、このホールでは何度涙が出るほどの感動を受けたかわからない。

ウィーンフィルハーモニーの定期公演は年に十回開催されるが（それぞれ土、日二回なので合計二十回）チケット入手は困難を極める。先祖代々からの会員のキャンセル券のみしか売り出されないからである。当然ニューイヤーコンサートのチケット入手は正規には不可能に近く、闇市場で十五万円とも二十万円ともいわれている。

中ホールはブラームスザールと呼ばれ、室内楽や小規模のリサイタルに使用される。舞台と客席の段差が少なく客との一体感が得やすい。舞台用の照明が暗いので明かりを得るのに苦労しているようだ。その他小ホールも幾つかあり、ウィーン音大の催し物などに使用されている。どのホールも響きは抜群に良い。

シュトラウスの像がある市立公園の近くにはコンツェルトハウスがある。ウィーン交響楽団の本拠地で大中小三つのホールがあり、こちらも毎日のように演奏会で賑わっている。ここでは「立ち見席」がないかわりに、シュプリンガーカルテというユニークなチケットを開演直前に売り出すことがある。これは空いている席ならどこに座っても良いというものでいわゆるキャンセル席に堂々と、しかも格安に座れるものだ。中ホールでも、入りが悪かったりすると係員から後ろの安い席の人達に、前へいっても良いとの許可がおりラッキーにも最高の席で聴けたりする。しかしどこの世界にも遅れて来る人はいるもので、よくもめている光景を目の当たりにした。チケット価格はピアノソロリサイタルの場合ソリストにもよるが、千五百円～九千円くらいで、オペラに比べると割高感があるので皆知恵をしぼっているようだ。

楽友協会大ホール舞台席より

（ピアニスト・高知大学教育学部助教授）

苦悩する現代山村（1）

大野　晃

地域社会学を専門とする私の研究対象は広く、大都市、地方都市、農村、山村、漁村、離島社会など多様な地域社会の住民生活をそれぞれの地域に出かけ調査し、問題を摘出・分析し、課題解決への具体策を考えていくことが私の主な仕事である。

いま、ここ十年程私が手がけてきた調査地を紹介すれば、イリオモテヤマネコで知られている西表島、アマミノクロウサギの生息地として名高い庵美大島の南部農村、北に目を転ずれば林業、木工芸が盛んな北海道の網走郡津別町、東北では秋田天然杉で有名な北秋田郡の上小阿仁村、関東では京浜工業地帯の中核をなし、公害でゼンソクの多発している地域で知られている川崎南部工業地帯などがあり、いずれも通いはじめて六年以上になる。なかでも、川崎の低所得労働者の千世帯をこえる生活実態調査は十三年にわたり、この間に一年間低所得労働者のアパートに住み込み現地調査を実施している。また、六年間継続してきた北海道津別町の離農に伴う高齢者問題とエゾシカによるビートの食害調査については、今春五月末から来年三月までの十カ月間現地に居を移し仕上げの調査を実施する予定。

加えて、平家の落人の里であり、柳田民俗学で取りあげられ広く知られるようになった宮崎県の椎葉村やその隣にある林道普及率全国一で、先ごろ「みどりの文化賞」を受賞した諸塚村へも通いはじめ、昨年から今春にかけ宮崎の山村へ四回ほど足を運んでいる。しかし、私の主要なフィールドは高知の山村であり、その調査も今年で十八年目を迎えている。

ところで、これから六回にわたり、高知山村に焦点をあてながら苦悩している現代山村の現状と課題を明らかにし、課題解決の具体策を考えなければならないが、今回は現代山村をとらえる私の基本的視点を述べておく。

「めぐら地に植えられた杉に囲まれ、日も射さない主人（あるじ）なき廃屋。苔むした石垣が階段状に連なり、かつて棚田であった痕跡をそこに留めている杉林。何年も人の手が入らず、間伐はおろか枝打ちすらされないまま放置されている〝線香林〟。日が射さないため下草も生えず、枯枝に覆われている地表面。野鳥のさえずりもなく、地下足袋の下でポキポキと鳴る乾いた音以外に何も聞えない〝沈黙の林〟。田や畑に植林された杉林に年ごとに包囲の輪を狭められ、息をひそめて暮らしている限界集落の老人。これが病める現代山村の偽らざる姿である」

これは昨年十二月、私が発表した「現代山村における限界集落化と『山』の環境問題」なる論文の冒頭である。この一文にみるように、現代山村は〝沈黙の林〟と化しているが、こうした状況が生み出されてきたその背景には、戦後日本資本主義の展開過程が深くかかわっている。周知のように、一九五五年を画期にわが国は重化学工業を重点的に育成し、農林漁業をこれに従属させることによって高度成長を実現してきた。このため農工間不均等発展が加重化され、農林漁業は輸入自由化攻勢のなか解体が押し進められつつ今日に至っている。

農工間不均等発展による産業構造の加重化された歪みは、地域社会に投影され、大都市と農山漁村との間に地域的不均等発展をもたらし、これが地域経済をはじめ教育、福祉、医療、文化、スポーツ等の人間のトータルな社会生活に地域間格差を生んでいる。とりわけ山村には、この地域間格差が鋭く立ち表われ、現代的貧困が重層的に蓄積されている限界集落が増加してきている。こうした限界集落に象徴される地域間格差は単なる格差ではなく、構造化された格差である。

現代山村は、構造的地域間格差の拡大によって、そこに住む人間が貧困化し、その人間の貧困化が、田畑、山林などの地域資源の管理機能を低下させ、自然の貧困化をもたらしている。この〈人間と自然〉の貧困化が相互規定的に進むなかで、いまわが国の山村は崩壊の危機に直面しているのが偽らざる現実である。

以上が現代山村をとらえる私の基本的視点である。次回は崩壊の最前線に立っている高知山村の実態を見ることにする。

（高知大学人文学部教授）

淋しきタール便

町田　吉彦

国の天然記念物であるニホンカワウソの生きた姿が映像で確認されたのは、七九年十月の須崎市の新荘川の個体が最後である。

六月一日の各新聞に「カワウソのタール便」とか「スプレイント」という耳慣れない言葉とともに、一昨年三月に佐賀町の海岸で採集された糞からの体毛の発見以来、久々にニホンカワウソ健在の記事が掲載された。spraintsをちょっと厚めの辞書で引いてみると、カワウソの糞とある。スプレイント（正しくは複数形なのだが）には、通常の糞便とタール便が含まれる。後者は、イタチ科の動物が肛門腺から分泌する粘っこい物質をさす。肛門腺は直腸に開口しており、タール便は肛門から排出されるものの、不消化排泄物である糞とは全く別の物である。

夜行性のイタチやタヌキが日中ウロウロする姿はないでもないが、ごく稀である。したがって、哺乳動物の糞はその生態を解明するための貴重な手がかりとなる。まず、糞の内容物と形で、落とし主が何者かがおよそ推測できる。スカトロジー（糞便学）には好ましくない意味もあるが、野外のスカトロジーは極めて真面目に実践される。これぞと思われる糞を発見すると、念入りに形を観察し、思いっ切り匂いを嗅ぐ。中には指でちょっと味わってみる猛者もいる。だが、種々の寄生虫の存在を考えると、臆病な私にはそこまでの勇気はない。やがておもむろに物差しを添え、納得のいく角度から写真を撮る。やおらピンセットを取り出し、うやうやしく摘み上げてポリ袋に入れ、嬉々として持ち帰る。

カワウソの糞は魚の骨や鱗と海老や蟹の殻の塊である。排泄後間もなくは黒いが、風雨に曝され、白くなる。イタチとカワウソの糞の区別は難しい。スペース・シャトルが宙を翔る時代になんとも情けないが、新鮮な糞が放つ強い魚臭は、カワウソとの有力な判断基準となる。匂い、すなわち、気体の成分を分析する機械は当然ながら存在する。ガス・クロマトグラフィーがそれである。この機械で一千万分の一以下の濃度の成分を検出し、物質の正体を暴くのは造作もない。しかし、このデリケートで無茶苦茶重い装置を持ち歩くわけにはいかず、犯人探しにはひたすら経験を積むしか解決策がない。

図体がでかい分、カワウソの糞はイタチのそれより太い。イタチの糞の表面は比較的滑らかである。似たような太さの場合、魚の太い骨がピンピン突き出していればカワウソの可能性が高い。県立のいち動物公園の絹田俊和副園長のお話によれば、飼育下のカワウソの排便時に、肛門が切れて出血することがままあるとのこと。あまりの人間臭さに、思わず二人で爆笑した。どちらが上品かは別として、イタチはクチャクチャと餌を噛み、カワウソはガツガツと大雑把に噛む習性に起因するようだ。

動物の情報交換には様々な方法があるが、匂いは最も普通の手段である。危険の伝達や縄張りの宣言にも使うが、雄と雌が出合う際には特に重要である。この重宝な匂いはフェロモンとよばれ、仲間に何らかの行動を起こさせる信号刺激（鍵刺激）の一種である。フェロモンを感知する昆虫の能力は桁外れで、十のマイナス十七乗グラムのフェロモンに反応するゴキブリもいる。下等動物と侮ってはいけない。この能力において、人間は問題外である。しかし裏返せば、彼らの一生は超極微量の匂いに確実に反応することで成立する。人間が合成した物質に反応し、その犠牲となるのは、与えられた刺激を拒否できない悲しい本能によるのだ。他の信号刺激は光、色、音、形、行動である。情報処理の中枢である脳が発達した高等動物では、音声や行動が次第に複雑化してくる。

何らかの手段で自分の存在を仲間に示すことは、相手がライバルであれ将来の伴侶であれ、自らが生き残り、また、子孫を残す上で決定的に重要である。強烈な匂いを発するカワウソのタール便もこの目的で排出されるらしく、発情期に多いのも確からしい。ニホンカワウソの成獣は単独で生活し、繁殖期にのみつがいを形成するといわれる。雄は薄情で、晩秋から初冬の交尾後、さっさと単独生活に戻る。雌は、翌早春、通常二頭を出産し、子育てに励む。

冬季の海岸部でカワウソの痕跡の発見例が多いのは間違いない。しかし、夏期の確実な出没地は未だ不明である。当然、川の流域も探索せねばならないが、可能性が皆無に等しいとはいえ海岸部にも未練が残る。たった五百メートルの調査に二時間は要る。炎天下、痕跡ゼロの確認作業は本当に辛い。体毛発見以後、一年半の調査は空振りの連続だった。

「今日も無かったなあ」

「そうですね」

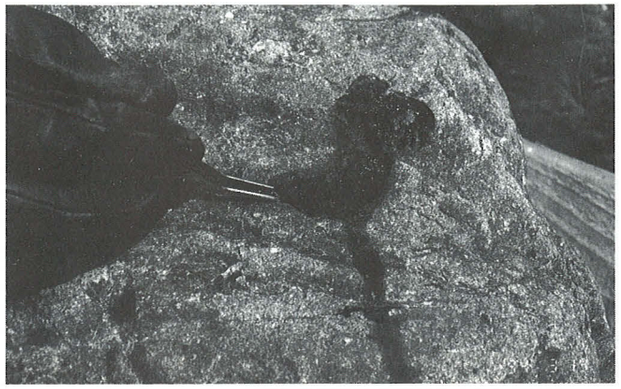
学生諸君といつもの極端に短い会話を交わし、溜息交じりに力なく復路のハンドルを握ると、頭を「絶滅」の二文字が占拠する。

昨年十月、佐賀町の海岸で久々に懐かしい匂いの糞に巡り合った。徹底的に通うしかない。地元の方々とも顔馴染みになった。皆さんの激励に、肩に食い込む写真機材も思わず軽くなる。カワウソ用の魚を道すがら購入し、現場へ運んでいたが、事情を知った漁協の方々が捕れたての魚を持ちきれないほど毎日快く提供して下さった。感謝感激である。

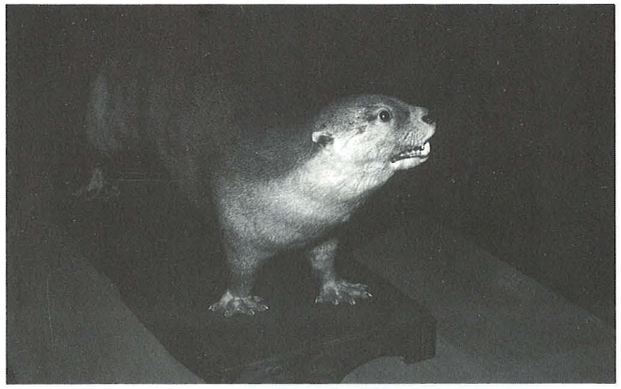
一月二十九日、いつも見慣れた岩場に真っ黒なタール状の物質が付着している。匂いは無い。オタマジャクシ型で、長さ八十ミリ、幅が十八ミリであった。ピンセットで剝がそうにも、かけらすら採集できない。イタチのタール便はせいぜい直径十ミリ程度、まずカワウソであろう。一週間後、再確認に行ってみた。驚くべきことに、無情にも土佐湾の荒波はタール便を跡形無く洗い去っていた。やむなく写真で何人かに検討してもらい、意見を伺った。カワウソとの判定もあったが、イタチではないとの慎重論も多かった。しかしとてつもない幸運が待っていた。三月十九日、十三日間連続して行った写真撮影の最終日のことである。調査に黙々と耐えてきた学生の原朋之君が「先生、何か黒いものがあります」と叫んでいる。カメラから僅か三十メートル。見れば艶やかなタール便ではないか。長さ六十五ミリ、幅三十ミリで、かすかに盛り上がり、強烈な海老の匂いが辺りに漂っている。そっくり剝ぎ取った瞬間、黒い液汁が滴り落ちた。その後、愛媛県立とべ動物園の山崎泰園長から、推定で排出後約二時間、最大級の成獣のタール便と思われるとのコメントを頂戴した。ニホンカワウソは生きていた。記録をめくると、タール便の発見は、大月町の海岸と三原村の下ノ加江川でのそれ以来、ちょうど十年ぶりの出来事であった。

カワウソが多数生息していれば、タール便は通常一カ所にいくつか排出される。同じ個体が繰り返し排出することもあるし、他の個体が重ねてすることもある。この場合は明らかに個体間の情報交換であろう。しかし、佐賀町のタール便はどちらも一つだけポツンと単独であった。辛うじて生き残っている仲間への縄張り宣言か、既に幻となった仲間への虚しい信号か、生息地を奪い続けた人間への無言の抗議か。謎は深い。事実は、カワウソを思う地元の方々の優しさが今回の発見へと導いてくれたこと、と信じて疑わない。

（高知大学理学部教授）



タール便を剝がした瞬間（佐賀町にて）



昨年８月、釜山市内で捕獲されたカワウソの剝製

読む　読む　読む

大野一郎著

『はだしで歩いた』

著者故大野一郎君と私とは、旧制城東中学と海軍兵学校予科を通じて同期生でした。そんなわけで、少年時代を回顧するときにあり勝ちな、身内話に陥いる幣をまぬがれえないであろうことをあらかじめお許し願いたいと思います。

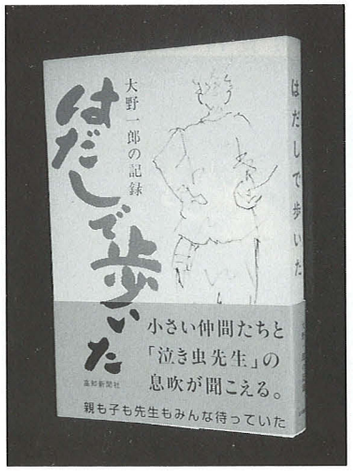
本の最後の方で城東中学の名投手、前田祐吉さんの「どういうわけか知らないが、大野さんはトテと呼ばれていた」という文章に出合いました。大野君がなぜトテだったのか、実は私も知らなかったのです。

それで妙に気になった私は、大野君と一緒に拙宅に訪ねてきてくれたことのある田村金寿君に、もう夜中といってもよい時刻でしたが、電話をしてみました。ところが、かれも知らないという。半ばあきらめていた私は、翌朝早く金寿君からの電話で起こされました。同じく東京に住む茶目（竹田義孝君）に聞くと、小学校で大野君と同期で故人となった明太（小島明太郎君）が話していたのを覚えている、というわけです。

小学時代、大野君が何かを「取ってこよう」と言うのを「トテコウ」と言うのが口癖で、「トテ公」がかれの渾名になり、それが縮まって「トテ」になったということでした。

大野一郎君は中学時代もトテでしたし、ついほんのこの間、街で出会う腰に手拭い、蓬髪姿の大野君も、やはり中学時代と少しも変らぬ、トテでした。

かれほど少年時代の純粋な魂を持ち続けた友人はいなかった、と思います。この本を読むまでは、それはかれの天性のものだとずっと信じてきました。



ところが、日記には

沈鬱な、明るさ、というものがあるか。沈潜した精神というものを、どうとらえるか。

（一九六七年九月七日）

といったような呻き声のようなものが書きつけられていました。

またこうも誌しています。

人間の極限状況というものは日常性の中に、どういう形でありうるものか、詩や、絵画や、というようなものが、たえず、そういう極限状況から生まれるものなのかどうか。いずれにしても、……高度な、精神の緊張感から、生まれなくてはならないのではないか。

（一九六七年九月十二日）

トテ君の天真爛漫の姿は、天性のものであると同時に、実はたゆまぬ自己研鑽の結果でもあったのです。

また日記には、たとえば堀米庸三の『正統と異端』が引用され（一九六八年冒頭）、教育実践とかかわって揺れ動く内面の葛藤が刻まれているようにも思います。

かれは今からもう二十年も前、私たちの中学同窓会『三島会』の記念記に『或る「美しき惑いの年」』という一文を寄せ、森郁夫、武政英三両君の死を悼んで、『二人とも「業半ば」という意味で非業の死と思われて心が痛む』と書いていましたが、日記に記録されている森君への弔辞は、この本のなかでも最も美しい文章の一つだと思います。（一九六六年八月十九日）。

大野君の全人格がその内面から生徒との心の交流に至るまで、余すところなく写し出されたこの本を、私たちが手にすることができるのは、何といっても旧制高校時代から深いところで親交を結んできた大和啓祐さんの友情によるものです。

多くの人びとに愛されたかれは、決して「悲業の死」ではなく、あのやさしい笑顔が永遠の輝きをもって残ることになり、うれしい限りです。すべての関係者の方がたに心からのお礼を申しあげたいと思います。

（山崎　拓・㈱山崎猛商店社長）

第10回高知の映像コンテスト入賞作品（昭和31年５月撮影）

高知を撮る

新京橋解体風景　清岡　義道

海水浴

風俗歳時記

レジャーや運動のため、海辺で水を浴びたり泳いだりすることが「海水浴」である。遠い昔からつづいてきたことのように思うのだが、日本で「海水浴」が人々になじまれるようになったのは、実は百年そこそこ前のことである。

もちろん漁師や海女は、魚や貝を採るため海に入っていたし、武士が水練のために海を利用することはあった。海辺の村人たちも、さまざまな理由で海で泳いでいたことも考えられる。だが今日のように、老若男女だれでもが「海水浴」をするというものではなかった。

いまではレジャーとして定着している「海水浴」も、明治のはじめころは一種の医療行為だった。つまり海水につかると健康になり病気がなおると考えられたのである。

日本で初めて「海水浴」という言葉を使ったとされる初代内務省衛生局長の長与専斎は、「海水ハ医療上ノ目的ヲ以テ言ヘバ一種ノ鉱泉即チ塩類泉ト見做ヘキモノ」（海水浴説）とし、海水浴が内臓疾患や呼吸器の病気に効能があると説いている。

冷夏の昨年と異なり今年は猛暑で、海水浴場はどこも賑わっているが、水着の売れ行きでみるかぎり、高知は余りいいところではないらしい。とくに女性水着がそうらしい。開放的な土地柄で意外な気もするが、どうやら太陽光線が強すぎて肌がこげるため、海水浴は敬遠されるらしい。そういえば肌の焼きすぎは美容への影響だけでなく皮膚癌の原因になるともいわれる。

水泳界でも、昔は日灼けで色の焦げた選手が優勝していたが、もうだいぶ以前から肌の白い日灼けのない者が優勝するようになっているとのこと。つまり完備した屋内プールで、年中休みなく練習を積んできた選手でないと優勝できなくなっているのだ。

水泳選手だけでなく、一般の人たちの屋内プール利用も増加の傾向にあり、どうやら泳ぐことは、戸外派と屋内派に二分されていく気配である。いま長与専斎が生きていたらどう言うのだろうか。

（普）

「コールトワニー」

トワニーよ永遠に

入木知代子

私達が合唱の仲間として出会ったのは、十二年くらい前になります。高知市の市民学校「さわやかコーラス」に集まった仲間が市民学校の終了の時「もっと歌いたい」の声で、OB会として出発しました。翌年おかあさんコーラス大会へのお誘いがあり、その時グループの名前を考えることになりました。「永遠（とわ）に歌い続けよう」と「コール・トワニー」と漢字を少しだけ洒落て読んでいるのですが、私達は、とっても気にいっています。トワニーになって十一回目のおかあさんコーラス大会も終わり、一息入れる間もなく昨年から愛媛県で開かれている「ほっとコーラスin松山」生涯学習全国シニア・シルバーコーラス発表交流会に今年も参加する予定で練習が始まりました。私達は気持ちだけは十分で、若いお母さん達に負けないのですが、五十才代から八十才代の仲間ですのでちょうどよい発表会になるのかな？

「高知花いっぱい会」

市民の心に潤いを

松岡　忠徳

昭和二十六年、高知市立中央公民館初代館長の時、焼け野原となった高知市を花と緑でいっぱいにして、市民の心に潤いをという願いで「まちに花を植えましょう」という運動を公民館活動のひとつとしていました。

この流れをうけて昭和三十六年四月二十七日、これらの主旨に賛同した市民が集まり、花いっぱいの地域社会の建設と自然愛護をめざして、「高知花いっぱい会」をつくりました。

それ以来、三十余年の活動を重ねてきましたが、現在、会員数は約一五〇名でつぎのような事業を実施し、市民の皆さんにも親しまれるようになりました。

一・花壇の栽培管理や技術講習
　高知桟橋サンフラワー花壇・丸の内緑地五輪花壇・中央公園の花壇の栽培管理。
二・野外研修活動
　野山や海辺に自然を訪ね、草花の観察

「高知葉風会」

日本の心を謳う

窪田　和葉

昭和二十八年十一月十日、高知市立中央公民館で、第一回記念箏曲演奏会並びに門人二十人による結成式を行いました。

高知葉風会は、以来地方文化発展のために、毎年中央より邦楽界の大家を招き、その秀れた演奏を直に耳にし、私達も共演させて頂き、古典または現代曲、洋楽との合奏、アンサンブルを含めて、演奏活動を重ねてきました。

日本の伝統音楽を若者に理解し伝えるために、市の文化祭、県の芸術祭には積極的に参加し、ラジオ・テレビ・舞台にと出演のかたわら、初心者の方々への指導を続け、今年で四十一周年を迎えることになりました。葉風会家元の故中村双葉師の「音は心の響き」であり「芸は人なり」の言葉を胸に、美しい箏曲の音・「音の心」を伝えたいと思っております。

土佐女子中学校、高等学校の邦楽部でも若い豊かな可能性を存分に発揮して、日本音楽の素晴らしさに触れようと、年一回の定期演奏会を開き、目を見張る程の成果を上げています。

今年の二月市立養護学校へ訪問コンサートを行い、小学・中学・高等部の生徒さん達に初めてお目にかかりました。皆さん輝く目で演奏を聴き、初めて見るお箏の伴奏で一諸に「春のうた」をメドレーで歌い、楽しいひと時を過ごすとともに来年も必ずお目にかかることを約束しました。

連絡先　高知市新本町一―一〇―二一
電　話　〇八八八―二五―一八七四

「クラシック音楽を楽しむ会」

モーツァルトの心を求めて

小谷　鉄夫

私たちは、レコードやCDを通してクラシック音楽を聴く仲間です。

バッハやハイドン、モーツァルトやベートーヴェン、またショパンやマーラーなど様々な作曲家の音楽を、毎月一回、一緒に聴いて楽しんでいます。

この会は、昭和五十五年（一九八〇）三園町の音楽喫茶「シベリウス」で知り合った仲間たちが中心になって、毎月一～二回定期的に集まってクラシック音楽を聴いてゆこうということからスタートしたものです。それから毎月休むことなく続けられ、今年の八月で二〇五回目の例会が終了しました。

この会の特色の一つは、毎回とりあげる曲にすべて解説を付けることです。第二は「モーツァルトの生涯と音楽」シリーズで、モーツァルトの主要な全作品を定期的にとりあげ、作曲順に聴いていることです。恐らく彼の最後の曲「レクイエム」まで聴き続けることになるでしょう。

現在、会員は四〇名、高齢者から高校生まで、会社員、退職者、家庭の主婦などが楽しい雰囲気のなかで毎月一回の集いを楽しんでおります。

クラシック音楽の好きな方、ご一緒に楽しんでみませんか。ご一報ください。

会　場　喫茶店「えるぴい」イベントルーム
連絡先　高知市はりまや町二―四―七
　　「えるぴい」岡本
電　話　〇八八八―八四―五六七八

仕事を持っている人、専業主婦の人それぞれですが、歌っている時は若人にもどって少々の音のはずれは気にせず（編曲は得意中の得意）「いやちごうちょったア」の連続です。週一回真鍋先生（七十七才）の指導のもと美しいハーモニーに近づきたいと中央公民館に集まって、温かい雰囲気でおしゃべりしながら皆で楽しく歌っています。永遠に歌い続ける仲間とともに!!

連絡先　高知市朝倉丙一九九二―三
電　話　〇八八八―四〇―一五五九

や郷土の文化施設の見学など。
三・しろうと花の写真展
　会員及び会員外の方にも呼びかけ、花への関心をたかめる。
四・七草がゆ賞味会
　二月に春の七草を摘み、会員自慢の手料理を賞味。
五・会報「百花」を年四回発行。
六・その外、花の種子の配布。などです。

連絡先　高知市本町四―三―三〇
　　高知市立中央公民館内
電　話　〇八八八―二四―六一〇〇

外貿・内貿の一大拠点として、環太平洋時代に対応した西日本の海の玄関「高知新港」。
昭和63年１月着手、平成９年度一部開港（３万トン貨物埠頭・１万３千トンフェリー埠頭）に向け今や建設も急ピッチ、海上にもその骨格を現し始めた。

風信

文献に関するかぎり

欧米では、図書館は大学と並ぶ学問の府となっている。情報センターとしての機能も重視され、仕事や生活に必要な情報がここから豊富に得られる。幅広い資料の収集を通して「知の体系」がつくられているからである。この資料畜積の厚みが信頼の基となっている。

それに比べると日本の公共図書館は、貸出しを伸ばすための図書の整理に重点がおかれ、量に質が伴わなくなっている感がある。一口にいって教養的で、少数の例外館をのぞいて「知の体系」が整備されているとは言いがたい。全般に痩身なのだ。教養館的あり方も頭から否定するわけにはいかないが、そろそろ本当の質を問う時代になっているのではないか。

館員の専門性も重要である。ある人が「〝大鏡〟はどこにありますか」と館員に尋ねると「鏡ならトイレにありますが…」という答えが返ってきたと呆れていたが、冗談ならともかくおそれいった話である。こんな図書館は県内にはないことを望みたい。

せめて文献に関するかぎりどんな質問にもたちどころに答えてくれる図書館はできないものだろうか。これができるだけでも情報化時代の図書館として、随分と存在感をアピールできる図書館になると考えるのだがどうだろうか。

（華）

文化セミナー '94

◇9月19日(月) 午後1時30分～　講師：福士　正博　東京経済大学助教授

『国際化の荒波の中の日本農業』

＊日本の農業はどうなるのか。ヨーロッパの農業政策なども紹介しながら、日本農業の未来を考えます。

◇9月27日(火) 午後1時30分～　講師：樺山　紘一　東京大学文学部教授

『人間―自然と文化のあいだ』

＊人間は自然とどう関わってきたのか。人にとって自然とは何か。自然のもつ文化的意味を探ります。

◇9月30日(金) 午後1時30分～　講師：加藤　　仁　ノンフィクション作家

『新しい生き方を求めて―自分流ライフスタイルの創造―』

＊本当に自分らしい生き方とは何か。実践例を紹介しながら、これからの生き方を考えます。

◇10月7日(金) 午後1時30分～　講師：森　まゆみ　地域雑誌『谷中・根津・千駄木』編集人

『小さな雑誌で町づくり』

＊地域雑誌の編集を通じて得た地域の素晴らしさや人とのふれあい。その土地に暮らすとはどういうことか、暮らしの魅力を語ります。

◇10月14日(金) 午後1時30分～　講師：島田　彰夫　宮崎大学教育学部教授

『日本人の食生活の再評価と健康』

＊日本人の食生活の歴史を振り返りながら、何をどう食べたらいいのか、日本人に最も適した食生活の方法を提案します。

＊＊＊会場はいずれも高知共済会館3階ホールです。＊＊＊

参加費：各回　500円

―― 参加申し込み、お問い合わせは文化振興事業団まで ――

第5回市民フロア企画展

SEIGO（西　悟）展

―10年の軌跡―

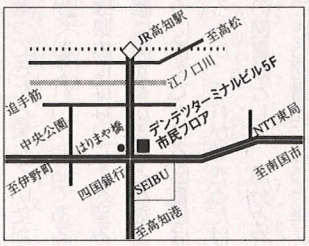
1983～1994

1994年9月8日(木)～9月18日(日)

10:00 A.M.～6:00 P.M.（会期中無休・入場無料）

市民フロア

（はりまや橋・デンテツターミナルビル　5F）



財団法人 高知市文化振興事業団　〒780 高知市本町5丁目2番3号　TEL (0888) 73－4365　郵便振替 01680-5-14869

訂正とお詫び

文化高知61号の文中を、つぎのとおり訂正しお詫びいたします。

	(誤)	(正)
P14 一段1行目	天然記念物	特別天然記念物
P14 二段28行目	比較的	比較的
P19	〔風伯〕	
一段9行目	整理	整備